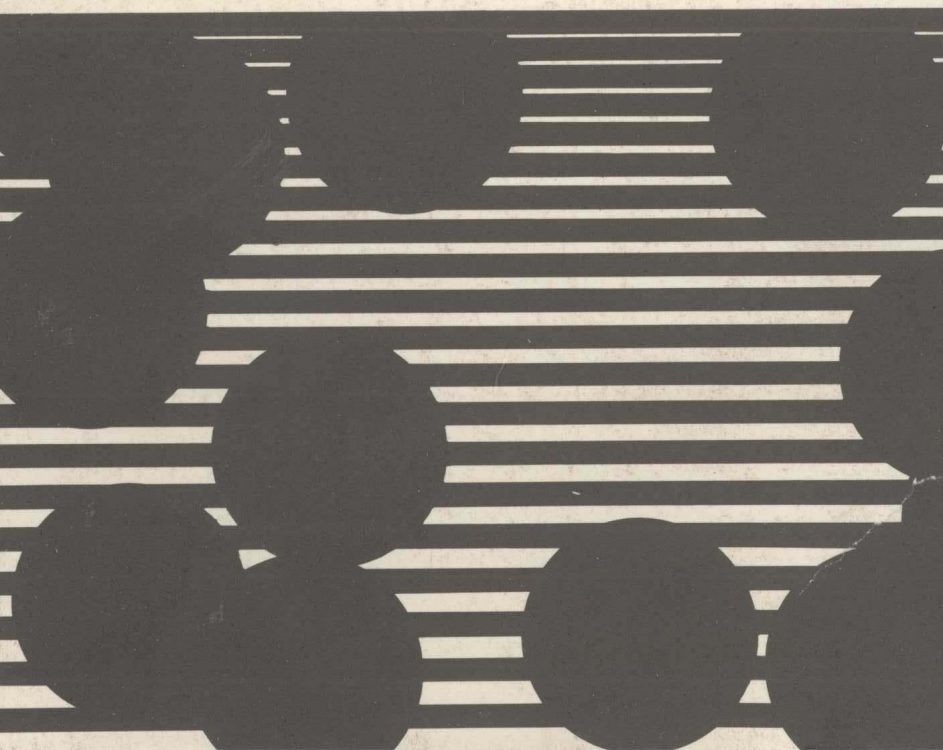


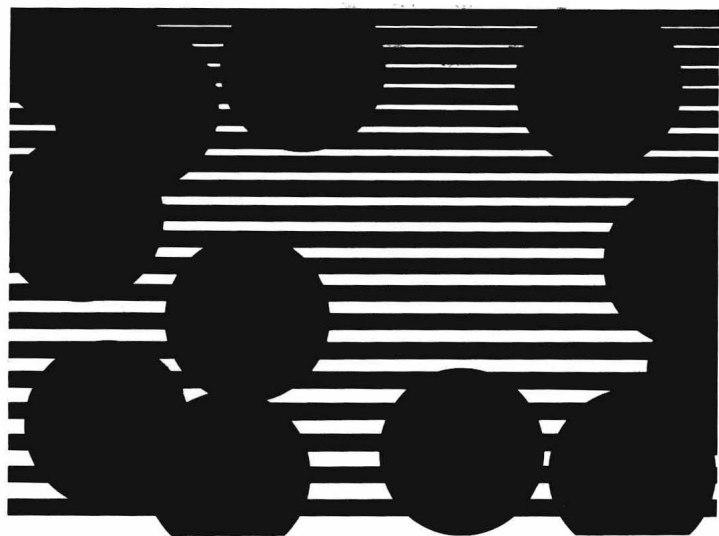
岩波セミナーブックス 17

昭和經濟史 中村隆英



岩波セミナーブックス17

昭和經濟史 中村隆英



昭和経済史

岩波セミナーブックス 17

1986年2月14日 第1刷発行 ©
1986年8月30日 第4刷発行

定価 2000 円

著 者	なか 中	むら 村	たか 隆	ふき 英
発 行 者	緑	川	亨	

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004887-2

中扉写真提供

(第一回)

(第二・四・五回)

(第三回)

誠文堂新光社
毎日新聞社
日本郵船

目 次

第一回	恐慌のなかの変容……………	1
	——一九二〇年代……………	
序説	六〇年間の足跡……………	3
1	昭和初年の経済と社会……………	6
2	不況の時代……………	27
3	昭和恐慌……………	41
第二回	バターも大砲も……………	61
	——一九三二—三七年……………	
1	高橋財政下の経済回復……………	65
2	産業発展と産業組織……………	80
3	二・二六事件と準戦時経済体制……………	93
第三回	戦争の爪痕……………	101
	——一九三七—四五年……………	

1	経済統制の開始	104
2	太平洋戦争	125
3	戦争の帰結——戦後への出発点	147
	第四回 廃墟からの再建	155
	——一九四五—五一年	
1	民主化政策の展開	160
2	再建への苦しみ	178
3	ドッジ・ラインと朝鮮戦争	189
	第五回 「強兵」なき「富国」	207
	——一九五二—六五年	
1	経済成長の出発点	215
2	二重構造と社会環境	235
3	所得倍増の時代	250
	第六回 「経済大国」	271
	——一九六六—七五年	
1	経済成長の「定着」	273

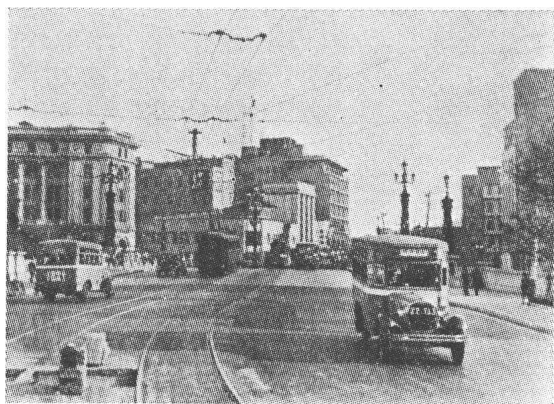
2	成長の終末……………	291
3	戦後最大の不況……………	305
第七回	古典的経済への回帰……………	315
	——一九七五年以後……………	
1	新しい経済局面への対応……………	317
2	国際化と自由化……………	340
結語	昭和経済史のまとめ……………	349
あとがき……………		363
索引……………		

装幀(カバー・表紙・本扉) 万 膳 寛

第一回

恐慌のなかの変容

— 一九二〇年代



復興成った日本橋から京橋方向を望む
(『日本地理風俗体系』第2巻より)

昭和元(大正 15)年 12 月 大正天皇没, 現天皇踐祚.

2 年 3 月 金融恐慌(片岡蔵相の「失言」), 4 月 台湾
銀行救済緊急勅令枢密院で否決, 若槻内閣総辞職,
田中義一内閣成立, 3 週間のモラトリアムにより鎮
静.

3 年 6 月 北伐完了, 中国統一, 張作霖爆殺事件.

4 年 7 月 田中内閣総辞職, 浜口雄幸内閣成立, 政綱
に海軍軍縮, 金解禁を掲げる.

10 月 ニューヨーク株式暴落, 世界恐慌開幕.

11 月 金解禁の大蔵省令公布, 翌年 1 月施行.

5 年 農業中心に不況深化, 昭和恐慌本格化す. 11 月
浜口首相狙撃され翌年 3 月, 首相を若槻礼次郎と交
代. 陸軍中堅三月事件を企図するが未遂.

6 年 4 月 重要産業統制法公布.

9 月 満洲事変勃発, イギリス金本位停止. 以後
ドル買い激化, 政府は強気に対応.

12 月 若槻内閣総辞職, 犬養毅内閣成立.
高橋是清蔵相となり金本位を停止.

人口・生産・物価・
生活

明治一一八年のなか
での昭和時代

序説 六〇年間の足跡

昭和六〇年で昭和時代が還暦を迎えた。これからこの時代の経済の歩みをたどって
みることにいたします。

はじめに、昭和時代をまとめて考えてみたいと思います。昭和六〇年は明治一一八
年になるわけで、もう昭和のほうが明治、大正よりも僅かですが長くなった。昭和元
（一九二六）年はまさに明治以来のちょうど半分目の区切りであり、近代日本の足跡の
ちょうど半分を、昭和がカバーしていることになる。太平洋戦争に負けてからでもも
う四〇年ですから、明治以来の後半の三分の一が太平洋戦争以後、いわゆる戦後であ
る。それだけを考えても、昭和の時代は長かっただけでなく、非常に激しい変化の時
代であったことがわかる。おそらく近代の多くの国の歴史のなかでも稀に見る激しい
変化が起ったといっているのだと思います。

最近いわゆる新興工業諸国（NICS）といわれる国々があります。アジアでは韓国、
台湾、あるいはシンガポール、香港などがそれにあたる。これらの国々の変わり方は
おそらく日本よりもっと早かったと、後世からはいわれることになるかもしれませ

図 1-1 産業別の有業人口と国民所得

産業別有業人口				産業別国民所得			
第 1 次 第 2 次 第 3 次				第 1 次 第 2 次 第 3 次			
千人							百万円
27,260	52.8	23.0	24.2	大 9	30.2	29.1	13,671
28,105	50.0	22.5	27.5	14	28.2	27.1	15,575
29,619	49.5	20.8	29.8	昭 5	17.6	31.6	13,062
31,211	46.3	21.8	31.9	10	18.1	36.6	16,432
32,500	44.7	25.3	30.0	15	18.8	47.4	35,641
33,290	53.4	22.3	24.3	22	35.4	28.5	十億円 969
35,626	48.3	21.9	29.8	25	26.0	31.8	3,384
39,261	41.0	23.5	35.5	30	23.1	28.6	7,087
43,719	32.6	29.2	38.2	35	14.9	36.3	12,833
47,633	24.6	32.0	43.4	40	11.2	35.8	25,691
52,110	19.4	34.0	46.6	45	8.6	43.0	51,194
53,015	13.9	34.0	52.1	50	6.6	35.8	125,169
55,811	11.0	33.5	55.5	55	3.6	38.2	246,722

有業人口は国勢調査、国民所得は大川一司他『国民所得』および経済企画庁推計。

んが、日本の変わり方は、少なくとも、これまでの近代の歴史のなかでも、いざばん激しいものだったといつてよからうと思います。そのような変わり方を考えてみるために、ちょっと図 1-1 を見ていただきます。昭和初年以來の日本の変わり方を産業別有業人口と産業別国民所得の二つの数字でたどってみることにしました。

大正一四年の数字がありますから、これを昭和の初めとすると、有業人口だけでも昭和五五（一九八〇）年までのあいだにちょうど二倍になっていることに気づきます。そしてその有業人口の構成比ですが、大正一四年のところを見ると、第一次産業、すなわち農林水産業はまだ半分を占めていた。それから第二次産業は製造業のほかに建設業と鉱山業を含みますが、それらを合

わけて二二・五%。運輸、通信、あるいは電気、ガス、水道、金融、商業、サービス、それから公務というような第三次産業を全部合わせて二七・五%というのが、だいたい昭和の初めの姿でありました。

それからの動きを見ていくと、第一次産業がそれまでずっと減ってきたのが、敗戦直後の昭和二二（一九四七）年には一〇%近く増加して、農業の人口が一八〇〇万人に近くなった。第二次産業、第三次産業はそれに見合って減少している。

そのあとの変わり方がまことに激しい。有業人口全体は、そのときから昭和五五年までに約二二〇〇万人ぐらい増えたのです。そのあいだに農業人口を中心にする第一次産業の人口が、昭和三〇（一九五五）年ぐらいまではまだ目立たなかったけれども、そのあと急激に減ってきて、最近の昭和五五年では一一%、六〇〇万ぐらいのところまで落ち込んでしまった。

その一方、第二次、第三次産業が増加してきた。昭和四五年ごろまでは第二次産業の伸びもかなり急速だったが、それからは第三次産業だけが増えて、有業人口の半分以上を占めるという状況になって現在にいたっています。

産業別国民所得の数字を見ても、大正一四（一九二五）年には、第一次産業の所得が二八%、第二次産業が二七%で、第三次産業はこのときすでに四五%で第一位になっていた。それから戦争中にかけてやはり第一次産業の比重が下がり、軍需生産を反映

して第二次産業が異常に伸びる。これはとくに昭和一五（一九四〇）年の数字を見るとはっきりしている。そして第三次産業の比重がいったん下がる。敗戦後の昭和二二年にはまた第一次産業の比重が上がるが、それから急に下がってきて、第二次、第三次産業が増える。なかでも第三次産業の比重が急速に上がっていく。この激しい変化が日本経済の動きを示していると思います。

もう一言つけ加えると、有業人口でいえば、明治の初めには第一次産業が約八割であった。つまりこの一一八年間に日本の経済の構造はまるきり変わってしまったといっているわけです。

1 昭和初年の経済と社会

昭和の初年の日本の経済と社会はどんなものだったのか、まずざっとスケッチしてみたいと思います。

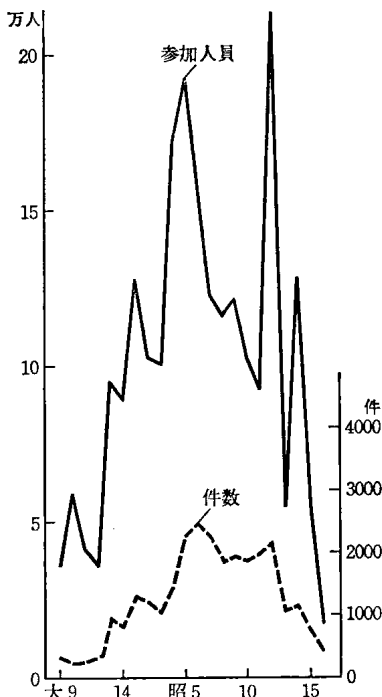
この時期の日本はすでに確立した資本主義社会になっていた。日本の資本主義社会が成立したのはいつかということには、多くの議論がありますが、私はだいたい明治二〇年代、とくにその終りにはもうそうなっていたと思っています。

第一次大戦中のブームを経て、戦争が終って一年後の大正九（一九二〇）年に大変な不景気が起こり、そのあと世界的にも不景気が続いていましたから、当時の日本経済はむしろ沈滞ムードであった。

しかしながら、この時期の経済はすでに各種の産業が出そろい、当時代表的だった繊維産業を中心に一流企業の地位がすでに確立している社会だった。

ただし、現代の企業とこのころの企業とはやはりずいぶん違う。いつてみれば、身の「人格をもつ資本家たち」が多数活動していましたし、貧富の差も今よりはるかに大きかった。このころの社会は、まだ昔風の——一九世紀以来の、マルクスやエンゲルスの時代のような資本主義が、世界的にも、また日本でも生き残っていたといっていると思います。たとえばアメリカを考えてみても、石油王のロックフェラー、鉄鋼のカーネギー、鉄道王のハリマンや、ヴァンダビルト、自動車のフォード、金融業界で覇を唱えたモルガンなど大金持の一族が大資本家としてアメリカの社会に君臨していた。日本でもほぼ同様で、三井、三菱、住友、安田のような大財閥もあれば、これに次ぐ古河、大倉、浅野、藤田、渋沢などの二流財閥もありました。もっと小さいが個人として相当の資金をもっている、いわば個人的な資本家といわれるような大小の富豪がまだたくさん活動していた。東京や阪神地方に大資本家が集まっていたのはもちろんですが、地方の都市にも、相当の資本家がいて、地域の産業を支配していたのです。

図 1-2 労働争議件数と参加人員



『日本労働運動資料』第10巻(東京
大学出版会, 昭和34年)

労働運動と農民運動

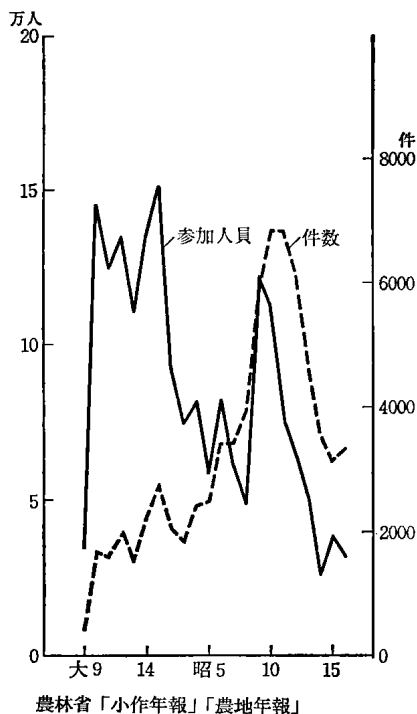
益の中から多額に出る時代だから、会社からの収入はきわめて多い。

一方、労働者といえば、給料がまだ非常に低い。多くは貧しい長屋に住み、ナッパ服を着て通勤をしている時代であった。そういう状況で、階級対立が、現実の問題として意識されたのも当然です。労働運動や農民運動が戦前でもっとも活発に行われたのはこの時代です。その動きは図1・2・3の通りです。

先日、浅野時一郎氏の『続・私の築地小劇場』(芸能発行所、昭和五六年)という書物を読みました。昭和四(一九二九)年から昭和八(一九三三)年ぐらいまで築地小劇場を本

こういう人たちは当時の貨幣価値で、百万長者とか千万長者とかいう大変な金持でした。多くの会社の大株主であり、いくつもの会社の重役を兼ねているけれども、重役会に出席するだけで常時出勤するわけではない。しかし、当時はまだ配当のほかに重役報酬も利

図1-3 小作争議件数と参加人員



扱とする新劇は、ほとんどすべて労働者、農民の階級闘争の芝居で、脚本は検閲でズタズタに切られていても、闘争を暗示するような台詞やしぐさや音響効果が入るだけで、ドンと拍手がわくという凄まじい熱気だったそうです。

プロレタリア演劇の代表作の一つとして、徳永直の『太陽のない街』という小説の劇化があります。共同印刷の争議を扱った階級闘争の芝居ですが、この時は超満員で入れないお客が沢山あった、原作者も入れなかったという話です。肥え太って、金鎖をぶら下げて、回転椅子に腰をかけた重役と、虐げられた労働者との対立が、見にく

る人たちにとっても実感をそそいたのでしょう。今小説を読んでみても、戦闘的な女子労働者や、共産黨員らしい争議指導者や、ふてぶてしい資本家や、偽善的なブルジョア夫人などの動きが、典型的ですけれどもいきいきとえがかれている。

農村に行くと地主の力が強い。その地主も、明治期までは、高い

財閥の支配力

小作料もとるけれども、村の公共的な役割を果たし、農業技術の指導をし、場合によっては、村の公共施設のために私財を投ずるというようにして、村のリーダーとしての地位を占めている人も多かった。東畑精一教授が、『日本農業の展開過程』（岩波書店、昭和二十一年）のなかで、農村の地主たちのなかに農業発展のためのイノベーターを見出しているのは、この側面を強調したみかただと思います。だがこの時期になると何もしない寄生地主が増えてきたし、都会に住んで小作米だけを徴収する不在地主も多くなる。労働運動と同様に、小作人が組織され、農民組合がつくられ、そして地主に対して激しい闘争を展開することも、この時代には多く見られた。

階級闘争全盛の状況がだんだんうすれていくのは、満洲事変をきっかけにして昭和七、八年から一〇年ぐらいまでであつたろうと思います。

そういうなかでもう一つ重要なものは、先ほどもちよつと触れた財閥であつた。三井の場合は江戸時代からの大商人です。三菱は岩崎家で、これは土佐の郷土上がりです。明治政府との関係で巨富を積んだものです。住友はやはり江戸時代からの商人で別子銅山の産銅がその主な仕事でした。安田は明治のはじめに富山県から出てきて、両替商をはじめて金融業者として大をなした。これらの財閥は、いずれも総司令部としての本社機構をもち、その社員は一族のものに限られていた。この四大財閥の支配、とくに三井、三菱の支配力は非常に大きいものがあつたのです。